

## 「平和を語る会」

### 平和を実現するために

#### 四竈 揚牧師

##### 一 私の被爆体験

私はこの講演で三つのことを申し上げようと思います。第一は私の被爆体験の一端です。一九四五年八月六日の朝、私は中学の二年生全員がその作業に動員され、市役所の建物の周囲の建物疎開の後片付けをする集場所にいきました。そこで「四竈は中学校に行つて本日の作業を知らないで登校してくる学友達十数名を引率して作業場に引き返すように」という教師からの伝言を聞き、学校に行きました。作業を始めた二百二十名ほどの同級生は教師数名と共に全日貝なくなりました。私もみんなと一緒に炎天下で作業に従事していたならば死を免れることは出来ませんでした。放射能も段違いに多く受けたはずです。同級生達は遮蔽物も何もないところでの作業です。殆ど全身火傷でした。私は文字通り一人だけそこから連れ出されて中学に行かされた為に助かったのです。そのことを考えるといたたまれないような思いがします。私の重い課邁です。

教室には七、人名の同級生が集まっていました。「もう少し集まったら出かけよう」と言っているとき、小早川君が「おはよう」と言つて入つてきました。その途端窓ガラスという窓ガラスが強烈な光で光り、同時に私たちは校舎の下敷きになりました。窓際にいた中島君がガラスの破片のために顔中血だらけになつていた木造校舎は一遍につぶされてしまいました。まるで学校のグラウンドに太陽が落ちてきたような光と爆風でした。以外はみな軽傷でグラウンドに這い出してきました。外に出るとワーン、という悲鳴、「助けてー」とか「お母ちゃん」と言つた声が聞こえ、すぐにその近くの倒壊した建物もばりばりと燃え上がっています。しかもあたりが暗くなつているのです。広島上空を覆つたキノコ雲のためでした。私はみんなに「これから必要になるから兎も角自分の弁当を捜そう」と言つて私も倒壊した校舎の瓦を剥ぎながら捜しました。黒い風呂敷包みだと思つて取り出そうとして吃驚しました。それは小早川君の頭だったからです。原爆が投下された瞬間、椅子に座つていた私たちは椅子の間に押しつぶされたのですが、彼は立つていたために一瞬遅れたのだと思います。私はこの時から何百人、何千人と言う死者に遭遇することになります。間近に死者と向き合つたのは小早川君が最初です。今でもありありと脳裏に浮かんでくるのは原爆の死者たちの姿ですが、それには三種類ありました。その第一が小早川君たち圧死者です。「おはよう」と言つて教室に入つて来た彼と私は二メートル位しかはなれていま

せんでした。私は生と死の厳粛さを思いました。もっと悲惨な状況だった人たちは第二の人々です。それは火傷をした人たちです。市役所の現場から中学まで走ってきた三名の寄宿舎の学友がいました。彼らの姿を見て私たちは懐然としました。火傷のために顔が丸く腫れ上がり、二倍くらいになっていたので。熱線のため、顔が腫れ上がってまるで海坊主のような格好でした。空想の火星人のような姿です。「君は誰だ」と聞いて名前を言われても誰が誰だか解りませんでした。僅か三十分くらい前には健康で快活な中学生だったのに「なぜこんな目にあったのか、どうしてこんなことになったのか」と彼らにとつても全く訳が分からなかったと思います。まるで夢を見ているように呆然と立ちつくしている「三人の火星人」の姿は忘れることが出来ません。私は八人の学友達と一旦市の南端まで逃げ、市内の中心部の火がおさまるのを待つて教会と我が家の焼け跡を見に舞い戻りました。広い電車道は処どころに焼けこげた電車が止まっています。人が通ることは出来ませんでした。案の定教会も牧師館もすっかり燃え落ち、僅かに石の門と塀がもとの姿を残しているだけでした。父は市外にある盲学校で講義をすることになっていました。つまりその学校に行くことにしました。電車道の両側はまさに屍累々と言った有様です。建物の下敷きになった人は焼け死んでおり、みんなまるで焼けぼっくりのような姿でした。亡くなった人達の忘れられない姿の第三のカテゴリーはこの焼死者達です。圧死、火傷死、焼死から逃げる事が出来た人々を長い間苦しめていたものは放射能による「原爆症」です。私は三日目には両親と、五日目には幸いにして探し回った姉と再会できました。今思い起こしても胸が熱くなることは被爆直後に重傷の姉が縁故疎開をしていた弟たちの処に葉書を出していることです。「自分が生きていること、必ず弟たちを訪ねるから待っているように」と書いていました。恐らく助かったのは自分だけだろうから小学生の弟たちをこれから育てなければならぬのは自分だ、と言う使命感があったものと思われれます。その葉書は薄汚れていましたが弟たちの手許にちゃんと届いていたことも不思議な感謝すべきことでした。

## 二. 核兵器根絶のために

核兵器の問題は結局人間の罪と深く関わっていると言わざるを得ません。戦争は敵と見なす者を抹殺することにまで行き着きます。日本は原爆では被害者ですが、日中戦争をはじめ太平洋戦争では加害者の面もありました。満州では「毒ガス」の研究が進んでいましたし、瀬戸内海の

大久野島では毒ガスの製造が行われていました。アメリカはベトナム戦争の時には「ナパーム弾」を使用し、イラクでは「クラスター爆弾」を用いて一般の人々を殺害しました。エスカレートしていく戦争の行き着く先は核兵器による「皆殺し」です。

現在スウェーデンにある国際的な研究所の調査では、ミサイルや爆弾に取り付けられる形の核兵器は世界中で約二万三千発。このうち、「配備状態」にあるものが約八千発あり、その中でも二千発はスイッチを押せばすぐ発射できる。と報告されています。万一核兵器が一握りの常軌を逸した人の手に渡ってそれが使われたとしたら、「迎撃ミサイル」があつたり、「報復爆撃」が行われたりしますから地球全体の破滅は明かです。核兵器問題は地球規模の大問題であり、それは人間の罪の行き着く先の破局であることはどんなに強調しても強調しすぎることはないと思います。ともすれば希望を失いかける私たちにとつて少し希望の灯になったのはアメリカでオバマ大統領が登場し、第二次大戦における原爆投下の道義的責任を認めたことです。広島と長崎の両市長が提言する世界平和市長会議は核兵器廃絶を目指す緊急行動(二〇二〇年までに核廃絶を実現するビジョン)への賛同を世界の主要都市に呼びかけています。私は「平和憲法を持つ日本」が平和への発信と行動をもつともつとすべきではないかといつも思っています。

### 三、キリスト者の平和運動　・ 生命の尊厳

限られた時間ですので第三の問題に入ります。クラスメート全員が死んで私一人が生き残ったということは後々まで私自身の存在を考えるポイントでした。私には何か私でなければできない使命がある、それを果たすために神様は生かしておいてくださったのだ、とすることが漸く解ってきました。それが大きな契機となつてクリスチャンになりました。クリスチャンとしてすべきことがたくさんある、と思つたからです。牧師になる気はありませんでした。自分にはその賜物はないし、父の牧師としての大変な生活を見ていると、とても自分には牧師の仕事は出来ない、と思つていたのであります。しかし結局牧師の道に導かれました。現在日本では経済的に困難な状況にある人が増えています。自殺をする人(自殺者)は年間三万人もいます。交通事故死は約一万人ですから平和な豊かな社会の中で三万人の自殺者がいると言うことは驚くべきことであり、悲しむべきことです。

自分の体験を述べながら「神様から与えられた生命」と言つたりすれば「お前さんのように特

別な経験をすれば誰だってそのように思うだろうよ」という方があるかも知れません。しかし誰にでもドラマティックな出来事はあるのです。私は子供が小さいとき家族の者に、原爆の話をしたことがあります。その時息子が「お父さんがその時死んでいれば僕たちは生まれていなかったんだね」と言ったのでハッとしました。その通りですが自分の人生とか自分の生涯、という点だけを考えて子供や子孫のことに思いがつかなかったことを恥ずかしく思いました。

皆さんの中にも「すんでの所で死ぬところだった」と病気や事故を思い出す方もあるでしょう。両親の生涯は、祖父母の時代はどうであつたかと精々三、四代遡るだけでも今自分に生命が与えられている、と言うことに不思議な感謝の念をもたれることと思います。人生はすべてドラマティックです。私たちの生命は神様からの贈り物です。それと共に一人一人に神様はなすべき使命を授けていらっしゃるのです。自分の命を神からの贈り物と考えない人は自分の命を大切にしないばかりか、他の人の生をも軽視します。私たちの周囲で自分の気に入らない人を憎む、否定してかかろうとする、その延長が民族の対立となり、国と国の争いに繋がっていくのです。それは核戦争にまで行き着く「人間の罪」であることを恐れ、神の与えたもう「平和」を目指して平和を構築していかなければならないでしょう。私たちは絶望的に見える状況の中でも希望を失いません。この世界に平和の君として神の独り子がお生まれになったのですから。

(二〇〇九年八月二日 平和聖日)